

第 I 部 地域の歴史と文化遺産の調査（京都府域）

宮津市府中地区の板碑調査

京都府立大学文学部考古学研究室

菱田 哲郎・向井 佑介・大平 理紗・川崎 雄一郎

1. 調査の目的と経緯

宮津市の府中地域は、古代丹後国の国府、中世の守護所といった政治の中心地であるとともに、丹後国分寺や籠神社、さらに成相寺や大谷寺など多くの宗教施設が設けられ、一つの宗教空間を形成してきた。これは、天橋立を神聖視してきたことと無縁ではなく、奇観が信仰をはぐくんだ顕著な事例といえる。雪舟の「天橋立図」はこのような宗教的な景観が盛り込まれた作品であり、中世の府中地区の特色がよく表されている。

上述した歴史的な背景のため、府中地域は石仏、板碑、石塔などの石造物が多く残されており、早くから注目されてきた。総合的な調査としては、『宮津市史』において大石信氏によって集成的に検討がなされ、銘文の読解も統一的に進められている。また、中世に遡る主要な石造物については宮津市の指定文化財となるなど、保護も加えられている。さらに、府中地域が重要文化的景観の選定を受けるに及び、これら石造物はその構成要素としての位置づけを与えられ、どこにどのような石造物があるかをより正確に把握することが求められるようになった。そこで、成相寺、大谷寺、本坂道に残る板碑について実測調査をおこない、その現状を記録することを計画した。本坂道は 2012 年 2 月、大谷寺は 2012 年 9 月、成相寺境内は 2015 年 12 月に調査を実施した。なお、これらの石造物の一部については、「府中地域の街道石造物調査報告」（『丹後・宮津の街道と信仰』）として 2012 年 3 月に報告しているが、今回の成果を正報告としたい。

以上の調査にあたっては、大谷寺 佐々木耕照氏、成相寺 石坪弘真氏、宮津市文化財保護審議会 羽淵徹氏、宮津市教育委員会 河森一浩氏にたいへんお世話になった。記して謝意を表したい。（菱田）



図 1 府中地区の社寺と古道
（写真は成相寺旧本堂からの眺望）

1. 大谷寺境内の板碑

本報告では、大谷寺境内および成相寺本坂道、成相寺境内に集められた石造物のうち板碑について報告をおこなう。本報告で扱う大谷寺境内および成相寺本坂道、成相寺境内の石造物については過去に『宮津市史』（宮津市史編さん委員会 2005）で調査がなされている。今回は過去の調査結果に、今回の調査で新たに明らかになった事実を加えて報告する。なお、板碑の名称、銘文、石材については過去の調査結果に準ずるが、碑高に関しては下部の埋没等により変動がみられるため、今回の調査で計測した値を報告する。

大谷寺は成相寺の参道である大谷道の途中に所在する。大谷寺境内の不動堂東側には多くの石仏・板碑・五輪塔が整然と並べられている。大谷道の石造物の大半が大谷寺周辺に集められており、さらに大谷寺から笠松公園に至る舗装された自然道には石造物がほとんどみられないことから、大谷道の舗装整備にともない大谷寺に集められ並べられたと推測される。

実測を行った1～11は大谷寺境内に所在する。

1～5、7～11はいずれも花崗岩を用いた自然石板碑である。1～5は種子一尊石塔婆であり、いずれも種子アが彫られた大日種子一尊板碑である。1は清音行人の銘文がみえる。碑高は106.0cmを測る。2は弘治3年（1557）の紀年銘が彫られ、逆修供養に伴うものである。碑高は95.0cmである。3は永禄9年（1566）の紀年銘と永善行の銘文がみえる。碑高は87.5cmである。4は元和7年（1621）の紀年銘が彫られ、干支と思われる部分は不鮮明だが辛酉であろうと推測される。碑高は91.3cmを測る。5は天正2年（1574）銘がみえ、碑高は87.5cmである。

6は三尊板碑であるが、上部半分ほどが欠損しているため額部の形状は不明である。岩質は花崗岩とみられ、碑高は現存高で21.5cmである。

7は種子三尊石塔婆である。市史によれば、もとは地面に直接置かれていたが、現在は自然石の基壇上に安置されている。また種子の下方左右に「権少僧叅智海 / 文正二年三月廿一日」と刻銘するが、丹後一宮大聖院の住僧智海の筆跡と思われるという。智海晩年の頃に建立された板碑であり、五点具足の種子の両界大日種子アーク・バーンクと阿弥陀種子を組み合わせ、三尊形式を逆形にした板碑は他に例がないという貴重なものである。

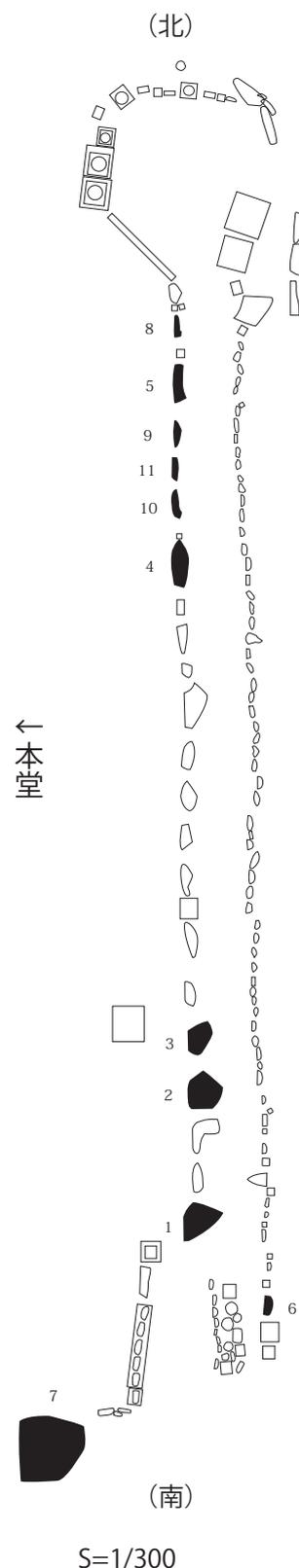


図2 大谷寺境内石造物配置図
(黒塗りが今回実測した板碑)



図3 大谷寺境内の石造物群（南から）

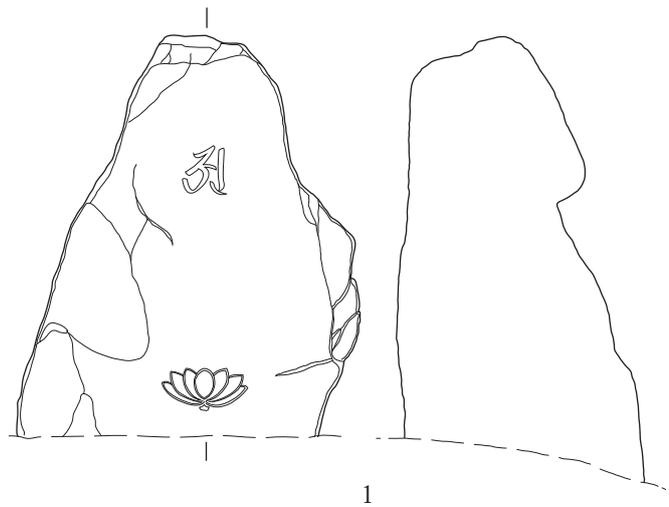


図4 大谷寺境内の石造物群（北から）

8～11は線刻五輪塔であり、舟形板碑五輪塔を表す背光五輪塔の前身形に位置づけられる。いずれも梵字キャカラバアを刻む。8は永禄12年（1569）銘と権僧都憲祐の銘文がみえ、碑高は70.0cmを測る。9は天正11年（1583）銘と善怡大徳の銘文を刻み、碑高は77.0cmである。10は慶長9年（1604）銘と道永禅門の銘文がみられ、碑高は70.7cmである。11は梵字以外の銘文はみられず、碑高52.2cmを測る。（大平）



種子ア
清音行人



種子ア
逆修弘治三年丁巳
徹海
六月十五日

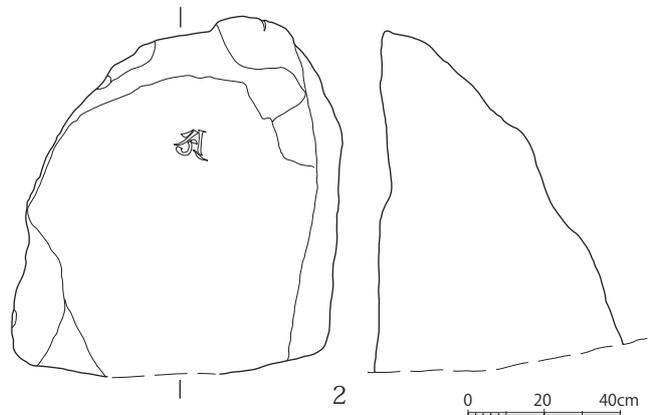
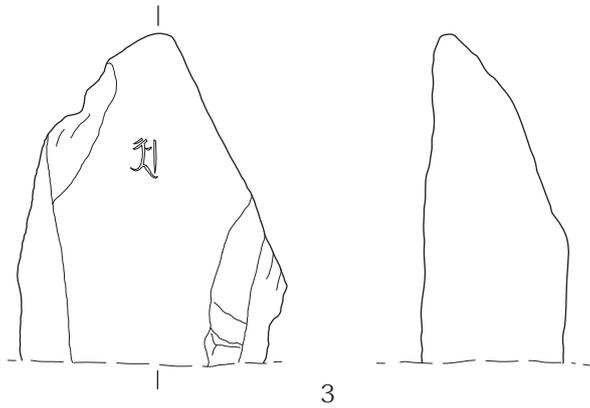


図5 大谷寺境内の板碑実測図



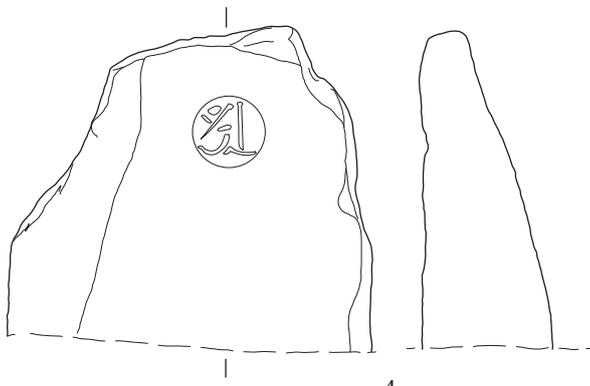
種子ア
永禄九年
永善行
四月廿三日



3



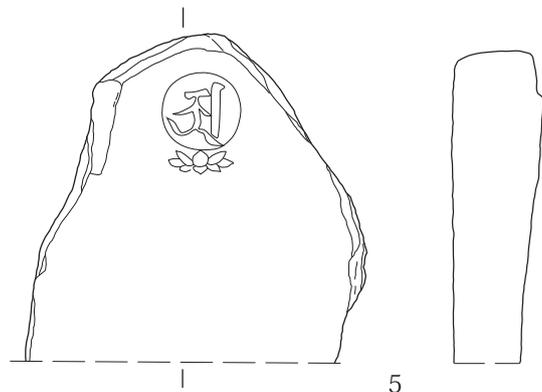
種子ア
元和七〇〇年
善盛大徳
八月五日



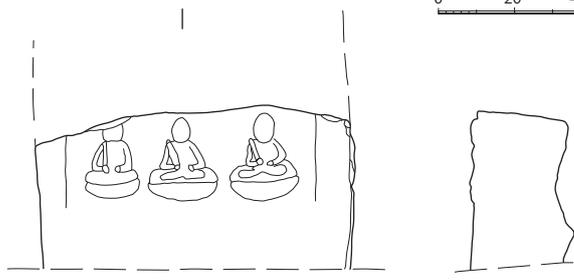
4



種子ア
天正二年
権大僧都法印順海
十月十日



5



0 20 40cm

6

図6 大谷寺境内の板碑実測図



種子
アーンク
キリーク
バーンク
権少僧図智海

文正二年丁亥三月廿一日



0 20 40cm

図7 大谷寺境内の板碑実測図



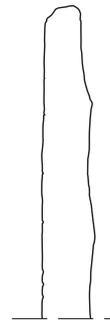
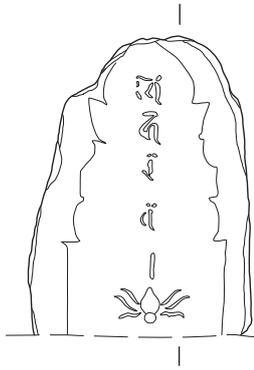
権僧都憲祐
梵字キヤカラバア
永禄十二年八月時正



8



善怡大徳
梵字キヤカラバア
天正十一年二月



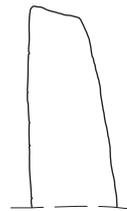
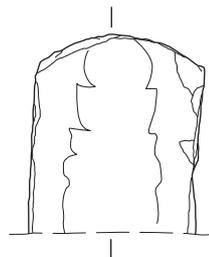
9



道永禅門
梵字キヤカラバア
慶長九年□□



10



11

0 20 40cm

図8 大谷寺境内の板碑実測図

3. 成相寺本坂道の板碑

1～5は成相寺本坂道に所在する。実測を行ったのは成相寺旧参道・旧中野村郷倉から本坂道を200メートルほど登った地点、本坂道の山道に入る手前の覆い屋内に安置されている5基である。市史によれば造立の趣旨はそれぞれ異なり、いずれも本坂道から出土したという以外由来は不明であるという。

1は如法経板碑であり、身部に対して広い額部をもつ。岩質は凝灰岩で、碑高は55.5cmである。2・3は地藏菩薩一尊板碑である。2は凝灰岩製で突出した額部をもち、応永10年(1403)の紀年銘を刻む。碑高は69.0cmである。3は花崗岩製で額部の突出はみられず、延文3年(1358)銘をもち、碑高77.0cmを測る。4は種子バンが彫られた金剛界大日種子一尊板碑である。明徳3年(1392)の紀年銘をもち、凝灰岩製で碑高は75.5cmである。5は題目板碑であり、額部が突出している。今回の調査で「化法鬼幽霊」の銘文を読み取ることができた。岩質は花崗岩であり、碑高は55.5cmである。5基のなかでは1が貞和4年(1348)と最も古く、最も新しいものが応永18年(1411)銘の5であり、南北朝から室町時代初めごろのものである。いずれも宮津市の指定文化財となっている。(大平)



図9 成相寺本坂道の板碑
(向かって左から1～5とする)



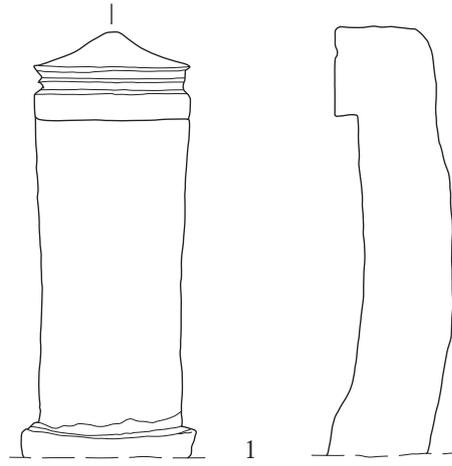
図10 本坂道登り口



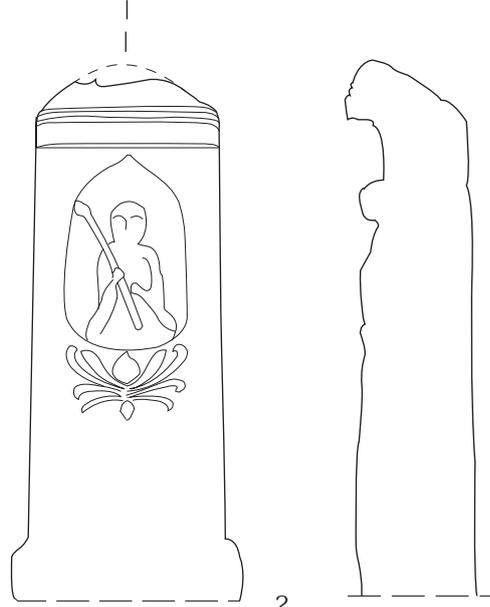
図11 本坂道道標



奉納如法經三部
貞和四年
九月廿五日



妙盛禪門
応永十年二月
廿五日



延文三年
三月十二日

0 10 20cm

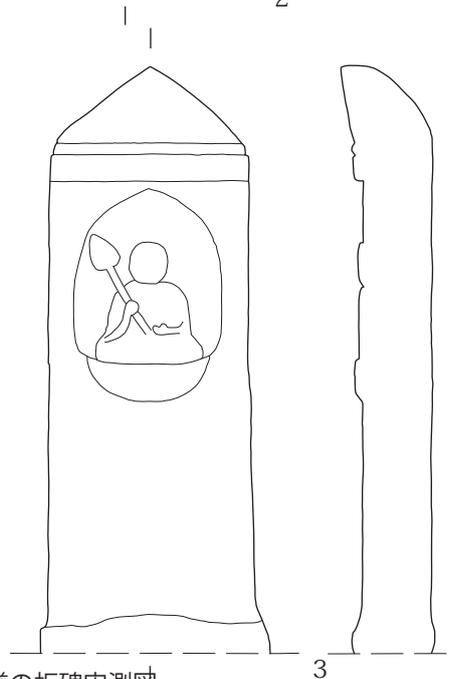
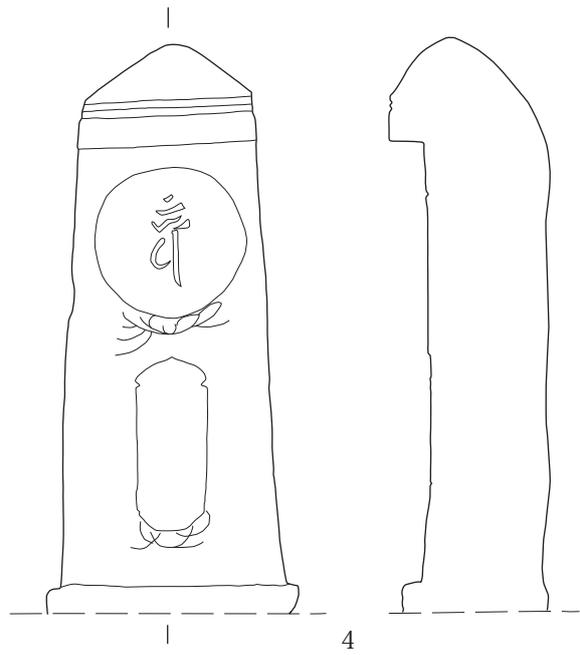


図 12 成相寺本坂道の板碑実測図



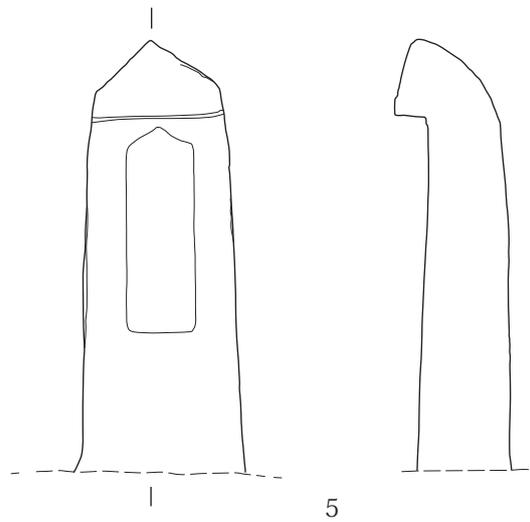
種子パン

明徳三年
信□禪尼
六月廿七日



南無妙法蓮華經

化法鬼幽霊
応永十八年六



0 10 20cm

図13 成相寺本坂道の板碑実測図

4. 成相寺境内の板碑

本章では、成相寺本堂西側に集められた石造物群と鐘楼南側の石造物に含まれる板碑について、報告を行う。これまで成相寺境内の石造物については、『宮津市史』に加え、『成相寺境内宮津市内遺跡発掘調査報告書』（宮津市教育委員会 2015）で調査報告がなされている。

1～5、13、17はいずれも種子バンが彫られた、大日種子一尊板碑である。1は天文15年（1546）の紀年銘と阿闍梨快春の名がみられる。碑高は66.0cmで、凝灰岩製である。2は、銘文から、文安4年（1447）にある女性（善女）の逆修供養の際に立てられたものであることが読み取れる。碑高は48.4cmで凝灰岩製である。3は塔身をほりくぼめ、その内部に種子バンと銘文が刻まれる。碑高は62.0cmで安山岩製である。4は表面の風化により、過去の調査では「永和五年」（1379）までしか読み取れていないが、今回その下に「二月」の文字が続くことを確認した。碑高は56.2cmで、凝灰岩製である。5の碑高は107.7cmで、安山岩製である。長享3年（1489）の紀年銘がみられ、権律師善海の逆修供養に伴うものである。13は鐘楼の南にあり、自然石を用いた板碑である。銘文から元亀3年（1572）の松本坊の逆修供養の際にたてられたものであることがわかる。碑高は54.0cmで石材は不明である。17ははっきりとした二条線を持つ大型の板碑で、碑高は172.0cmである。阿闍梨長資の名と「文明七年」（1475）の紀年銘がもられる。

11は風化が激しいが、銘文の一部から、『宮津市史』で報告されている文亀3年（1503）の五大種子板碑であるとわかる。今回、新たに「文亀三」の下に彫られた「年」の文字を読み取ることができた。碑高は割れているが、折損した部分をつなぎ合わせた際の全長は66.5cmになる。石材は凝灰岩である。

12は自然石の種子一尊板碑である。梵字アに似た種子が塔身に刻まれるが、詳細は不明である。花崗岩製で風化が進んでいる。碑高は71.0cmである。

14～16はいずれも自然石の種子三尊板碑である。14は、正面左下部分が大きく剥離していることから、左下の種子及び銘文の一部が欠落している。残る二つの種子も種類がわからないため、尊名が不明であるが、過去の調査で読まれた「天正六」（1587）と「逆修」の文字は確認できた。碑高は86.5cmで、花崗岩製である。15は阿弥陀三尊種子板碑で種子キリーク、サ、サクが刻まれる。銘文は判別しがたいが、過去の調査より「天正」の銘がある。碑高は82.0cmで、花崗岩製である。16は釈迦三尊板碑で、種子バク、マン、アンが刻まれる。銘文からは天正2年（1574）に天徳春蔵正禅門の逆修供養の際に立てられたと考えられる。碑高は98.0cmで、花崗岩製である。

10は浮彫五輪塔板碑であり、東方発心門が刻まれる。銘文の多くは風化により判別できないが、「文明十年」（1478）の銘は読み取れる。碑高は58.9cmで安山岩製である。

6と8はいずれも阿弥陀一尊板碑である。6は阿弥陀仏の両脇に銘文が刻まれている。銘文には「寛正四年」（1463）の紀年銘と「實秀大徳」の名がみられた。今回の調査では「實秀」は判読が困難であったが「大徳」の文字は確認できた。碑高は43.0cmで安山岩製である。8は文安元年（1444）の紀年銘がみられる。碑高は80.8cmで安山岩製である。

7は地藏一尊板碑である。上端部が欠損しており、菩薩像の頭部の一部も破損している。ま

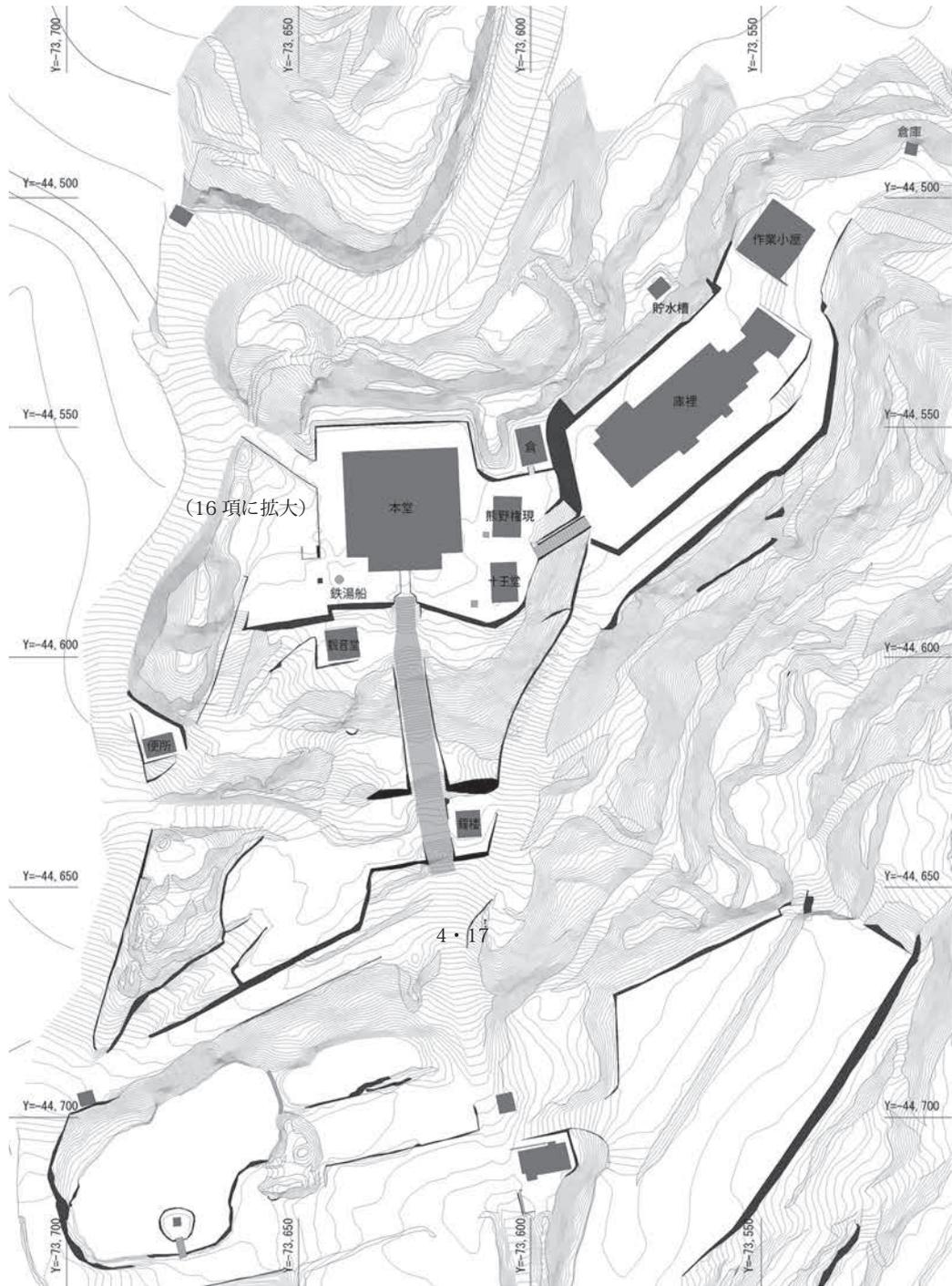


図 14 成相寺境内平面図（宮津市教育委員会提供）

た若が銘文を覆っているが、過去の調査より、「天文十二年」（1543）の紀年銘と「阿闍梨快春」の名が刻まれていることがわかる。碑高は 44.4cm で、凝灰岩製である。

9 は菩薩一尊板碑である。上端部が欠損しており、菩薩像の頭部の一部も破損している。銘文によると、天文 13 年(1544)に阿闍梨快春の逆修供養が行われた際に立てられたものである。碑高は 36.0cm で凝灰岩製である。

以上の板碑を含めた、本堂西側と鐘楼南側の石造物は現在の境内地周辺から集められたよう



図 15 成相寺本堂西石造物配置図

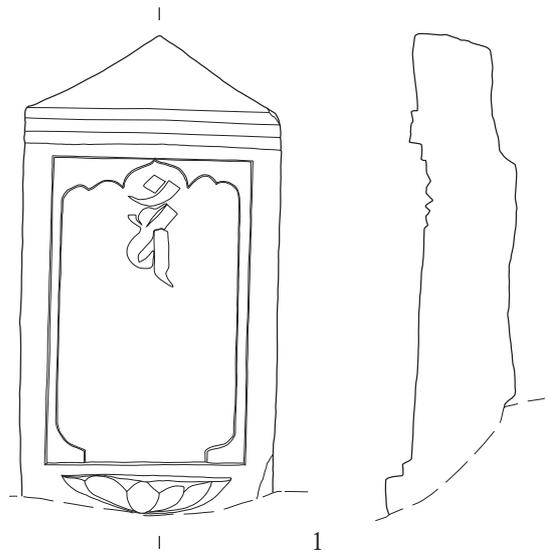


図 16 成相寺本堂西の石造物

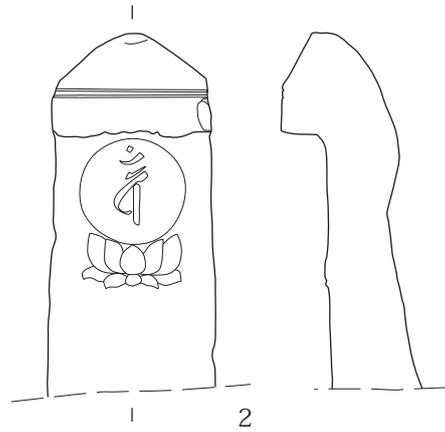
であるが、実態は不明である（宮津市教育委員会 2015）。今回調査した紀年銘のある板碑は 14～16 世紀のものであり、最も古いものは 4 で 1379 年（永和 5）である。時期としては 15 世紀半ばから後半のものが多い。石材は、凝灰岩 7 点、安山岩 5 点、花崗岩 4 点、石材不明 1 点で、花崗岩などの自然石を用いた板碑は天文～天正年間に流行していたことがわかる。また銘文から、逆修供養に関わるもの、僧侶の名前が刻まれたものが目立つ。（川崎）



種子パン
 嵯天文十五季
 阿闍梨位快春
 十月十三日



種子パン
 逆修為善女敬白
 文安四年八月日



0 10 20cm



種子パン
 明應五年
 長舜大徳
 十二月六

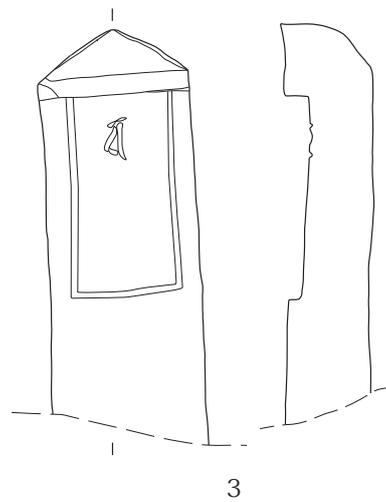
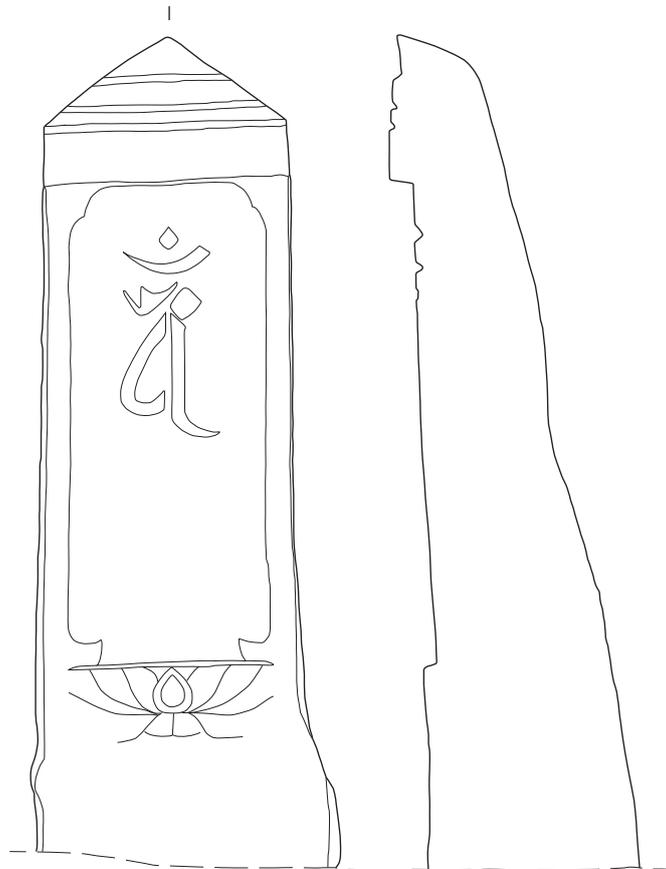
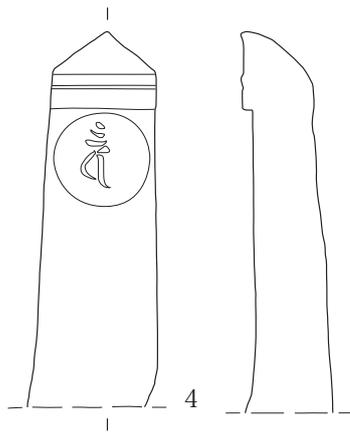


図17 成相寺境内の板碑実測図1



永和五年二月□



種子ハン

5

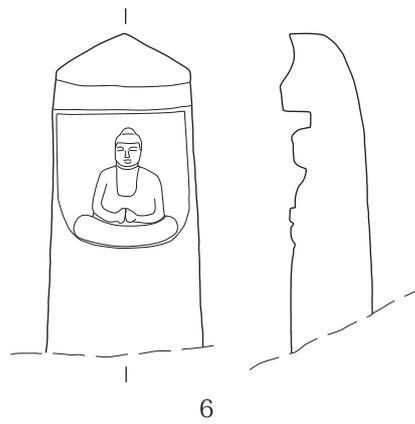


長享三年
権律師
アピラウンケン
善海逆修
八月十五日

図 18 成相寺境内の板碑実測図 2



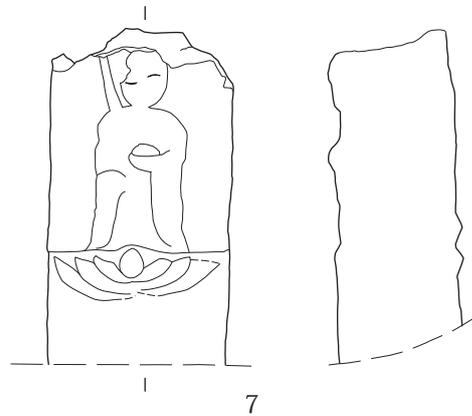
實秀大徳
寛正四年



6



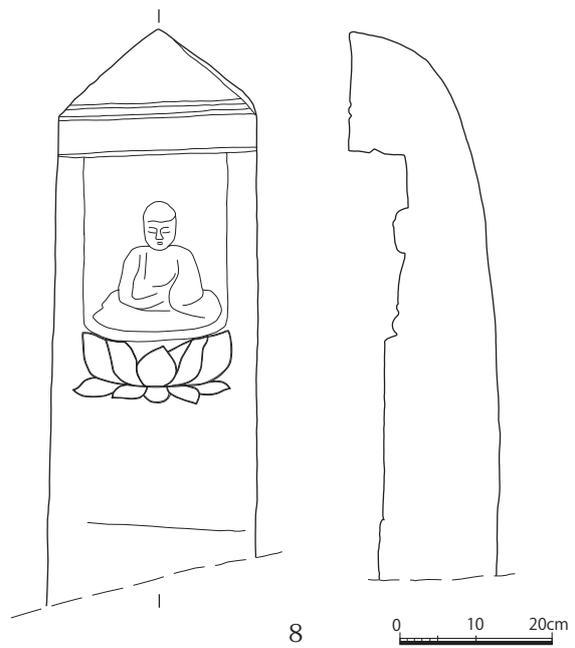
阿闍梨快春逆修
天文十二年八月時正



7



妙□坊諸□
文安元年八月日

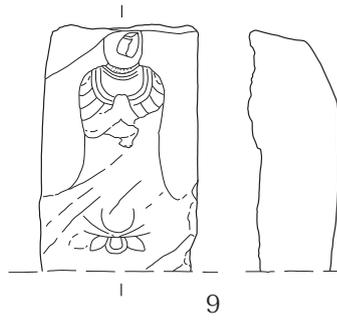


8

図19 成相寺境内の板碑実測図3



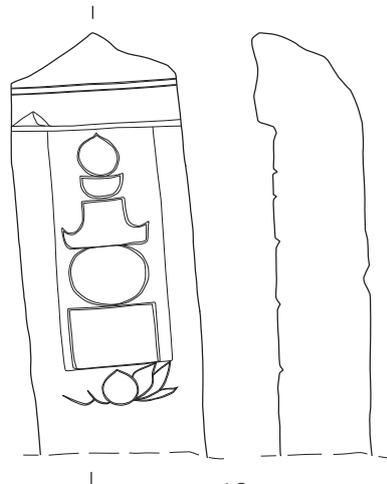
阿闍梨快春□□
天文十三年八月時正



9



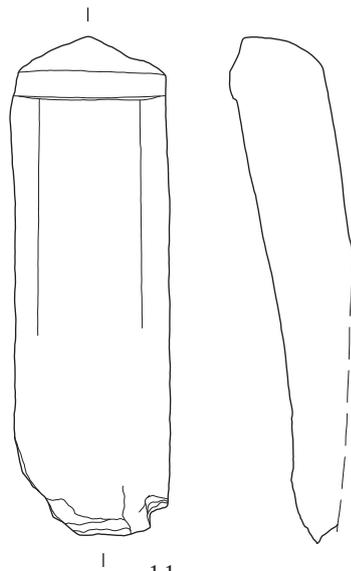
□□文明十戊戌八月□□
□□□□□□為□



10



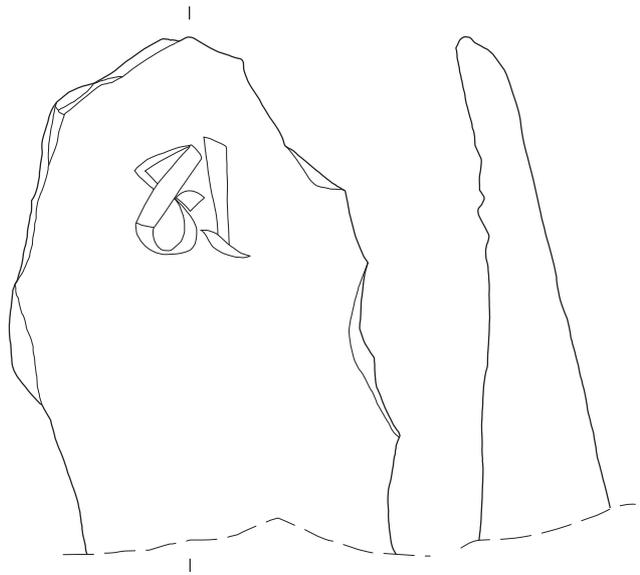
梵字キヤカラバア賢廣
文龜三□年
十一月八日



11

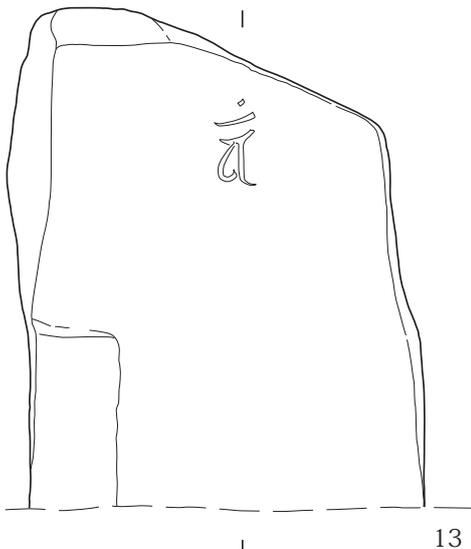
0 10 20cm

図 20 成相寺境内の板碑実測図 4



12

□ 天文 □ □
 □ 権大僧都 □



13

種子パン
 為松本坊逆修
 □ 敬白
 元龜三壬申年

0 10 20cm

図21 成相寺境内の板碑実測図5



天正六
 逆修
 □□

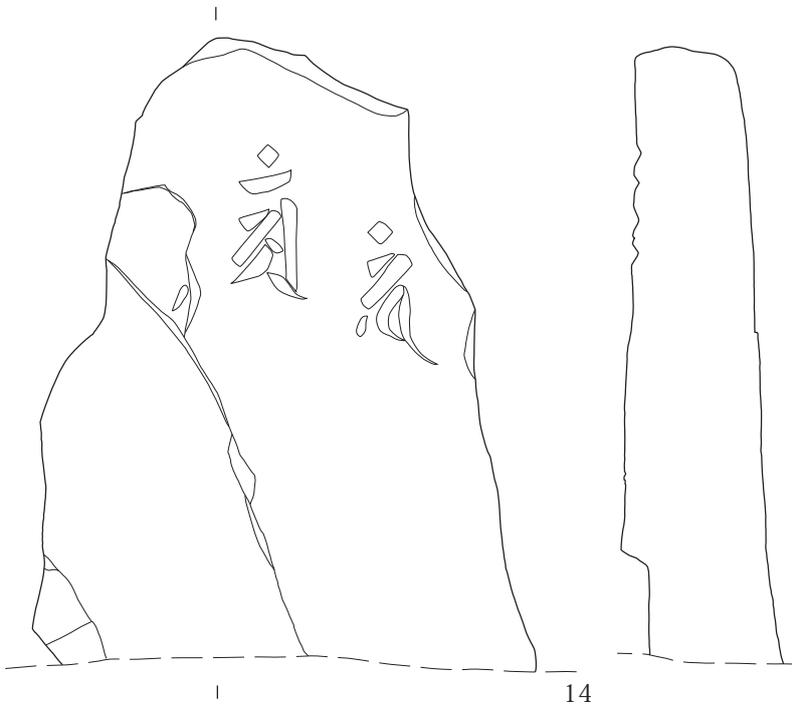


図 22 成相寺境内の板碑実測図 6



種子キリク
サク サ

五月 一月 天正 信
門 口

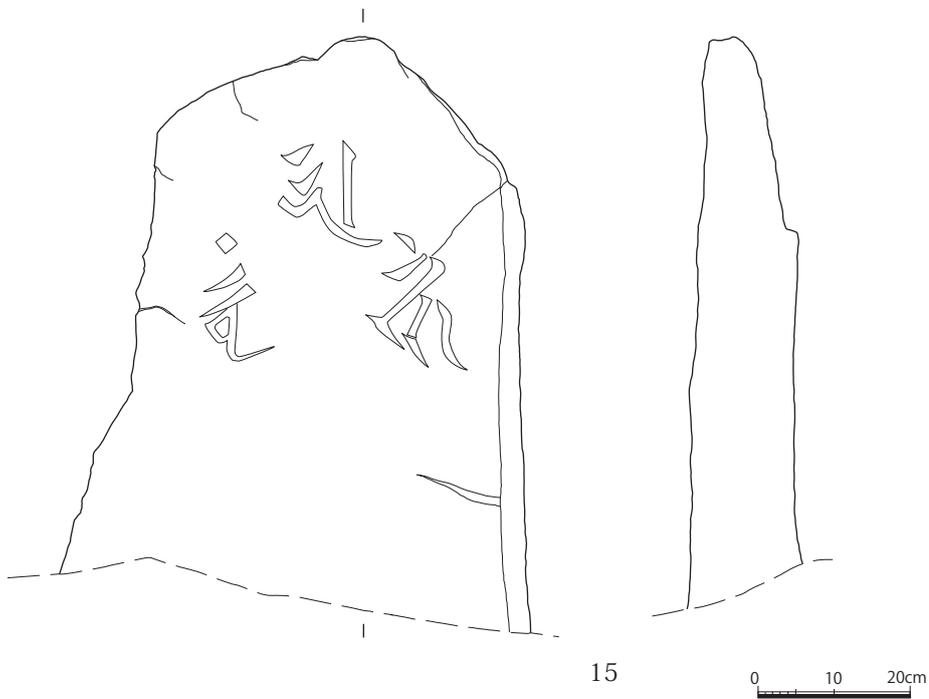


図 23 成相寺境内の板碑実測図 7



種子バク マン
 アン
 逆修
 天正二甲戌歳
 文月初七日

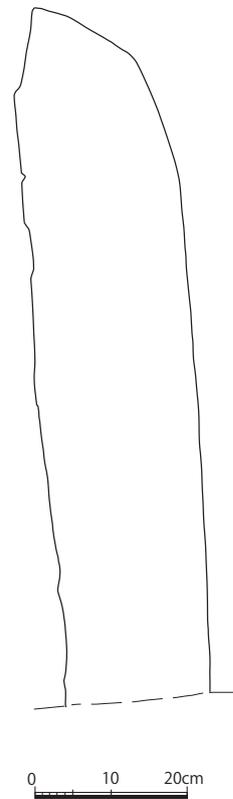
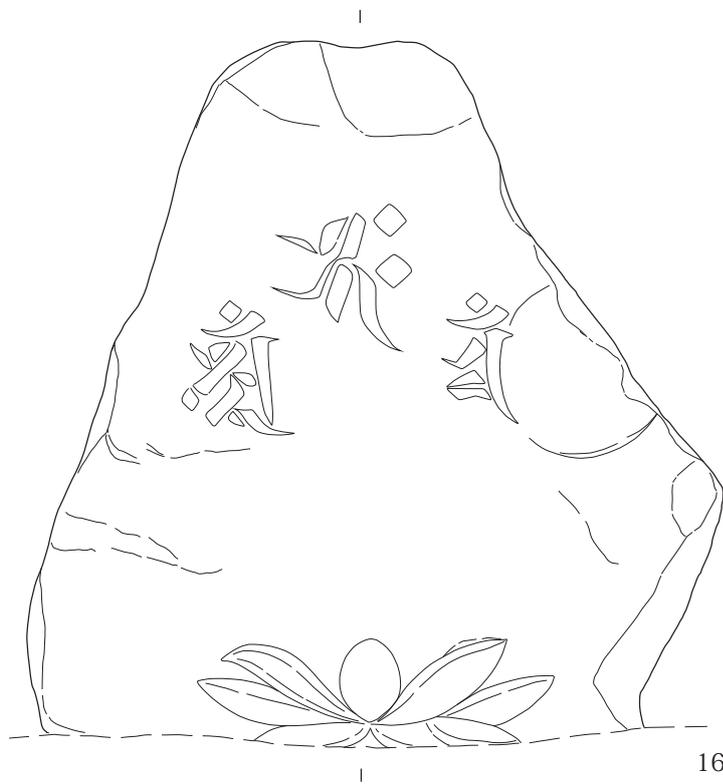
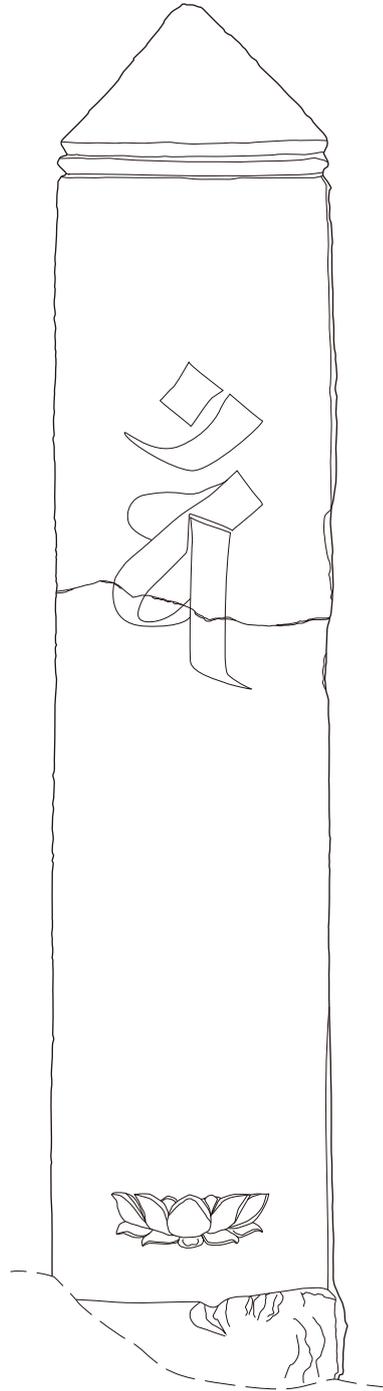


図 24 成相寺境内の板碑実測図 8



種子バン
阿闍梨長資
文明七年乙未
七月五日



17

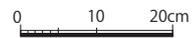


図 25 成相寺境内の板碑実測図 9



図 26 古墓B群の石造物群



図 27 明徳四年銘板状一石五輪塔（中央）

5. 旧境内古墓群の石造物

『成相寺古記』には応永七年（1400）の大規模な山崩れを契機として堂塔が現在の場所に移されたことが記され、現境内地の北側上方が14世紀まで成相寺が存在した旧境内地と推定されている。この旧境内については、近年、範囲確認のための測量と発掘がおこなわれ、あわせて周辺に存在する古墓群の分布調査も実施された（宮津市教育委員会 2015）。

今回、現本堂の西側に集積された石造物の調査とあわせて、古墓B群に由来する石造物の現状確認をおこなった。古墓B群は旧境内の北側から南西にのびる尾根上に分布し、その頂部ちかくに造成された階段状の平坦面に、周辺から集められた五輪塔・石仏・板碑などが多数ならべられている（図 26）。そのなかで最もふるい紀年を有するのが、明徳四年（1393）の銘をもつ板状一石五輪塔である（図 27）。正面に地輪から空輪へと下から順に大日如来親身真言の梵字を刻し、地輪正面には左右にわけて「寛善房／明徳二二（四）年十一月廿八日」と刻まれる。『宮津市史』別冊および『日本石造物辞典』は高さ 70cm とするが（大石 2005・2012）、現在は基部が掘りだされて高さ 81.0cm、幅 15.0cm、厚さ 12.0cm を測る。（向井）

おわりに

数多くの石造物が現存する府中地域において、成相寺はその分布の中心をなしており、その主要なものはすでに『宮津市史 別冊』などに整理されてきた。しかし、石造物の詳細な実測図が公表されているものは少なく、今年度の調査では、本堂西側の石造物を中心に、写真撮影、銘文観察、実測図作成をおこなった。また新たな試みとして、三次元写真測量を実施し、個々の石造物のデータはもとより、石造物群全体の空間分布を精密な三次元情報として記録した。今後、こうした石造物の記録と公開を継続していくとともに、三次元写真測量のデータを利用し、視覚的にわかりやすい映像資料として一般に公開していく予定である。（向井）

【参考文献】

- 中嶋利雄 1983「歴史時代の府中（その四）」『中野遺跡第4次発掘調査概要』宮津市教育委員会
- 大石信 2005「宮津市域の石造遺物」宮津市史編さん委員会編『宮津市史 別冊』宮津市役所
- 大石信 2012「成相寺大日種子板碑」日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 上杉和央編 2012『丹後・宮津の街道と信仰』京都府立大学文学部歴史学科
- 宮津市教育委員会 2015『成相寺境内 宮津市内遺跡発掘調査報告書』